

20 幼児の言葉指導とICT機器

筆者は昭和56(1981)年から3年間、養護学校(肢体不自由児)で教諭をしていた。現在では学校教育法での学校種の名称が変更となり、**特別支援学校**となった。当時の肢体不自由児の教育課程は、A教育課程は健常児に準じる、B教育課程は健常児の下学年に準じる、C教育課程は養護学校(知的障害児)に準じる、D教育課程は重度重複障害児に準じる、と分けていた。

当時は中学校と高等学校の理科教諭免許状をもっていたのみなので、英語は門外漢であったが、中学部の生徒でB教育課程に該当する生徒が、当時とても楽しそうにソニー製品の**トーキングカード**を用いて、英語を勉強していたことを今でも鮮明に覚えている。それを使っている様子を見ている上司の英語教諭が、「この子たちは、この音がでる機械が大好きです」と得意げに説明をなされる姿もはっきりと覚えている。

B6判大の絵カードの下の部分に磁気テープを貼り付け、それを固定された読み取り装置の上に通すと、絵カードに合った内容の音声流れる。例えば、雄牛の写真が印刷されているカードにはOXと文字も印刷されている。それをカードリーダーに置くと、「オックス、モー」と音声と鳴き声が出る。その音声を聞いたくて、生徒はカードを繰り返しカードリーダーに置く。このカードの形状が、つまり生徒の手に納まりやすい大きさで、自分でカードリーダーに置くことによりスイッチが入り、音が出て主体的に取り組むことができるシステムが、学ぶ動機となる。会話ではないが、子どもは何度もカードとのやり取り、発声の繰り返しを楽しむ。楽しみながら正確な発音を身に付けていく。

Information and Communication Technology (ICT, 情報伝達技術) 機器が教育のみならず、いろいろな分野に浸透する昨今、トーキングカードはかなり発展していると考えていた。インターネットで探すと、トークアロングカード(talkalong-cards)がその仕組みを引き継いでいることが分かった。主題は「ディズニー英語で息子はバイリンガル」であった。この種のICT機器、英語教材は多く発売されているが、素朴な「自分でカードを主体的に置き、音声を聞き、その出た音と同じように教師や友だちと会話するように何度も発声する。そして、深い思考ではないが深く発音を理解する」こんなアクティブラーニングの申し子のような機器がディズニーの教材として40年弱継承されていたことに感銘を受けるとともに、子どもをはじめとし保護者の方々を含むユーザーの確かな選別眼に敬意を表したい。

筆者は1995年以降、オーストラリアの保育に関わってきた。オーストラリアと

日本の言葉指導の教材で共通しているのはPicture Books, 絵本である。日本では紙芝居, パネルシアター, エプロンシアターも盛んである。オーストラリアでよく耳にするものとしてドラマがある。日本語に訳すと, 寸劇がもっとも適していると思う。日本では, ひな祭り発表会などで, クラス全員で10~15分ぐらいの劇, 最近ではオペレッタ風の演技をするところもあるが, 朝の会などで短時間にロールプレイング的なドラマを取り入れているところは少ないと思う。幼児にとっては, ディスプレイ映像よりは絵本, 絵本よりは寸劇の方がより言葉の理解が深まるという考えである。

最近利用されるようになった英語関係のICT機器に, 音声翻訳機, 製品名でポケットークSがある。ポケットークについては, 2020年1月9日にテレビ東京系列の「カンブリア宮殿」で, その開発者ソースネクスト社の松田憲幸さんとポケットークが紹介された。

松田憲幸さんは, アップル社やグーグル社の幹部が在住するシリコンバレーに移り住んで, その方々と交流なさり, ICTというよりその基礎となる仕組みを日頃の付き合いの中で教えてもらい, 2017年12月に音声翻訳機の発売に至ったとおっしゃった。進行役の村上龍さんがポケットークの性能を褒めていらっしゃる。この半年間筆者がいろいろ試した結果だが, 音声翻訳機の性能は流れる情報の量に比例するようである。邪推かもしれないが, インターネット上のグーグル翻訳を利用しており, その翻訳の精度が高いのは, 日本語とアメリカ英語の翻訳の利用度は高く, 利用するほどAIの学習機能により翻訳精度が高まっていくからと考えられる。ブラジルのポルトガル語の翻訳の精度は, アメリカ英語ほどは期待できない。ネパール語の翻訳はほぼずれる。モンゴル語は翻訳の対象になっていない。(2019年8月1日現在)

2019年12月にポケットークSが発売されたときに, これまでのものと区別するために, 以前のものはポケットークWと表示されるようになった。ポケットークSに加えられた性能は, 文字や活字を写真に撮り, それを翻訳することである。

筆者は, 現在, 幼児教育, 特に幼児の英語教育にポケットークが利用できないか, その是非について研究している。

(横井 一之)